

めでいかすどる
Medicastre



「 子年の年男・年女 」

鶴岡地区医師会

20年 1月号

年頭のごあいさつ

意志あるところ、道あり

鶴岡地区医師会

会長 中目 千之

あけましておめでとうございます。

会員のみなさま、また職員のみなさま、あるいは、この、めでいかすとるを愛読していただいております、いろんな職場、施設のみなさまにとりまして、今年もよい年でありますようお祈り申し上げます。

1. 医師会の行動計画；平成20年度

1) 特定健診・特定保健指導の開始

今年の大きな変化としては、まず、この特定健診・特定保健指導の開始があります。これまでの健診事業の主体者が市町村から医療保険者にかわり、内容もメタボリックシンドロームの早期発見、早期是正に主眼がおかれています。特定健診・特定保健指導は、効果が検証されているわけではありません。この制度を導入して、はたしてメタボリックシンドロームの人を減少させることが、医療費の減少、罹病率の低下、死亡率の低下等に結びつくのかどうかをこの制度を導入することで検証しようとするもので、それゆえに厚労省の壮大な実験といわれております。いろいろな矛盾点も指摘されており、この制度の中での受診勧奨基準値がかなり厳しく、むしろこの制度の導入で医療機関を受診する人がかなりふえて、一時的には医療費は増大する可能性があります。また、医療機関においては、個別健診が鶴岡市全域で行われますが、生活機能評価、特定健診、後期高齢者の健康診査の3つの健診を同時に行わなければならない、当初はかなり混乱することも想定されます。これに対しては、市と綿密に連携して、会員の先生方、事務職員の人たちに丁寧な説明を行っていきたいと考えております。

2) 介護予防事業の定着

鶴岡市では地域包括支援センターを中心に、介護予防事業が行われています。当医師会でも地域包括支援センターの下で、在宅介護支援センターふきのとうを運営しています。介護保険制度のほうは、鶴岡市では、現在、すでに効果的に運用されておりますが、今後は、介護予防事業の設備整備、運用、利用者への説明などを中心とした、より一段とレベルアップした介護予防事業の運営を定着させる必要があります。そのために当医師会では、この分野でも、医療と福祉の連携という観点から、今年は大きく関与していく方針であります。

3) 湯田川温泉リハビリテーション病院における回復期リハ病棟の運営

昨年、3ヶ月間を要して、介護療養病床を廃止し、回復期リハ病棟にしました。すでに満床状態が続いており、今後、後述する連携パスをもとに、荘内病院との緻密な連携体制を構築することになっております。このことに関しては、竹田院長が詳細に述べると思いますので、簡単な紹介にとどめます。

4) 連携パスの構築

医療法の中の医療法第30条の4で、これからの医療計画として、4疾患5事業の目標・医療連携体制、医療圏の設定という項目があり、中でも4疾患である、がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病の連携パスを構築することが義務付けられております。当地区における連携パスでは、すでに大腿骨近位部骨折における連携パスが先行しており、現在は脳卒中の連携パスが完成しつつあります。がんにおける連携パスは後述する庄内プロジェクトの中で構築することになります。

2. 庄内プロジェクト

平成19年度厚生労働科学研究費補助金 第3次対がん総合戦略研究事業「緩和ケアプログラムによる地域介入研究」に鶴岡市(荘内病院を基幹病院とする)が、柏市、浜松市、長崎市とともに選ばれ、今後3年間このプロジェクトを施行していくこととなります。荘内病院と当医師会の連携のもと、鶴岡市でも、充実した緩和ケアとくに在宅緩和ケア体制をこの機を活用して構築し、市民の要望に答えたいと考えております。昨年は、荘内病院の外科主任医長鈴木聡先生が2ヶ月間、また同病院看護師2名、当医師会訪問看護師2名の計4名の看護師が4ヶ月間、緩和ケアの先進地、東札幌病院で研修を行ってきました。全員、相当の決意と情熱をもって帰郷しました。この庄内プロジェクトは、荘内病院の医師、看護師はもちろん、われわれ医師会の医師、訪問看護師、薬剤師会、歯科医師会、市の保健師など、多くの協力なくして遂行できるものではありません。各方面の多くの人たちのご協力をこの紙面をお借りしてお願いする次第であります。

3. 百聞は一見にしかず：視察の重要性

昨年の9月中旬には、上述の東札幌病院、11月初旬には当医師会健康管理センターの将来を見据え、富山市医師会健康管理センターをそれぞれ視察してきました。東札幌病院での、カンファレンスの雰囲気、ボランティアの多さ、また、富山市医師会健康管理センターでの、すさまじいまでの経営努力。視察でしか分かり得ないもの、決して、本や紹介文からでは分かり得ないもの、それは各々の職場、現場で働いている人たちの情熱でした。東札幌病院での緩和病棟では、平均年齢33歳の若い看護師

達が、気迫と情熱を持って、医師と同等、あるいはそれ以上の関係でぶつかり合っているのには驚かされました。富山市医師会健康管理センターでは建設に命をかけた情熱的な会長、両副会長のエネルギッシュな行動、一臨床検査技師（女性）が事務長に抜擢されてからの、本人の経営に関する努力、執念。これには頭が下がる思いでした。このようなことは、その施設に行かない限り、触れることはできないし、学ぶことはできないものです。多いに触発された視察でした。

4. めでいかすとる

「めでいかすとる」はフランス語で「やぶ医者」という意味です。われわれ医師はいつになっても、大成することはなく、診断能力はもちろん、患者さんへの接遇も含め、常に俺はまだやぶ医者だなあ、と自省をし、成長しなければならないという意味をこめて命名されたものです。日本特有の文化として、日本人には自律自省の精神があり、それを忘れたからこと今の荒廃があるといえます。「めでいかすとる」を肝に銘じて、今年一年充実した医療を行いたいものです。一方で、われわれ一人ひとり、固有のいろんな才能を有しています。ただ一生のうち、その能力を発揮しないで終わる人が多いというだけのことです。能力を発揮するしないは、強い意志、高い志（こころざし）を持つか否かだけです。上述のように、今年はかなり多くの事業に取り組む一年になりますが、最後までやり遂げるといふ固い意志を持てば、道はおのずから開けてくるものと確信しております。物理学者で随筆家の寺田虎彦のことばに、「人間とは一つの微分である。しかし、人智の究め得る微分は人間にとっては無限大なるものである」というのがあります。自分の持っているかぎりない能力を信じて、それを発揮する一年にしようではありませんか。

年頭のごあいさつ

新年を迎えて

湯田川温泉リハビリテーション病院

院長 竹田 浩洋

新年おめでとうございます。会員の諸先生におかれましては、ご健勝にて新春をお迎えのことと思います。昨年は、懸念されていた医療崩壊の危機が現実のものとなり、われわれ医療人にとってはまさに最悪の年といえる、由々しき事態に陥ってしまいました。偽装問題多発にも象徴されるように、荒んだ世相があらわになった年でもありました。

政府もようやく医療抑制政策の誤りに気付き、今年の診療報酬改定は僅かながら、久しぶりのプラス改定となる見込みとなりました。マスコミの論調もどうやら風向きが変わり、医療を擁護するものが増えてきたのはせめてもの救いです。追い風が変わった世論を背景に、医療の崩壊だけは何とか食い止めなければなりません。医療関連死問題で明らかになった「医療と司法を隔てる理解の壁（小松秀樹氏）」にも引き続き警戒が必要でしょう。

明るいニュースを探すのに苦労するような昨年でしたが、私たちの病院では、思いがけず諸橋先生という有力な加勢を得ることができ、大いに意気が挙がっているところがあります。整形外科医不在という懸案が解決され、病院のレベルアップに繋がっただけでなく、10月からは常勤医になることを承諾して頂き、医師4人体制が実現したことにより、介護保険適用の療養病棟を、回復期リハビリテーション病棟に転換することができました。

回復期リハビリ病棟は、地域医療の中では、近年急増し続けている救急患者、特に高齢者の急病や外傷患者について、急性期病院にお

ける治療終了後の受け皿としての役割を担っています。同時に、1日当たりのリハビリ時間を長く取れ、十分量のリハビリが提供できる病棟として、在宅復帰率を高める意味で、リハビリテーション病院機能の中心的な役割をも果たしています。高齢化率の上昇とともに該当患者は年々増加し続け、当院においても1病棟だけでは絶対的に病床不足の状態にありました。回復期リハビリ病棟の増床が実現したことは、長年の課題がやっと克服されたということになります。

一方、介護保険療養病床が廃止されることにより、いわゆる医療難民、介護難民の発生が懸念されています。診療の現場では当然これを放置することはできません。健康保険療養病床の入院期間に関する制限の撤廃やリハビリ期間に関する特例規定を活用し、施設を含む医療連携の強化を図りながら、医療・介護難民となる患者さんにできる限りの救済の手を差し伸べて行きたいと考えております。

回復期リハビリ病棟の増床は経営面にも貢献し、病院の体質強化に役立ちます。また、現在準備中の脳卒中地域連携パス導入にも対応するものです。今後当院が、よりリハビリ病院らしく特化していく方向で、病院スタッフの意思統一もなされております。本年はこれらが確実に実を結び、さらに飛躍の年になれるよう、努力して行きたいと考えています。

今年も昨年同様どうぞよろしく願い致します。

『在宅医における口腔ケアの意義と実際』

鶴岡地区歯科医師会

理事 毛呂光一先生

はじめよう口腔ケア

口腔ケアとは、口腔の疾患予防を最優先し、さらに健康の保持・進、リハビリテーションなどによって、クオリティ・オブ・ライフ(QOL)の向上を目指した科学であり技術です。

具体的には、健診、口腔清掃、義歯の着脱と手入れ、咀嚼嚥下のリハビリ、歯肉・頬部のマッサージ、食事の介護、口臭の除去、口腔乾燥予防などがあります。

口腔ケアの目的は、大体以下の10項目になります。①う蝕、歯周病の予防と治療 ②誤嚥性肺炎の予防 ③唾液分泌の促進 ④摂食・嚥下のリハビリテーション ⑤口腔粘膜の健全化 ⑥口臭の除去 ⑦爽快感 ⑧生活のリズム作り ⑨正常な味覚の保持と食欲増進をはかる ⑩会話などのコミュニケーションの改善などです。

口腔ケアの実践にあたってはまず、よく相手の口の中を観察することが大切です。ポイントは以下の9項目になります。①強い口臭はないか ②流涎、食べこぼし、むせがないか ③食時間の延長、食事量の減少はないか ④歯や義歯を毎日磨いているか ⑤食物残渣があるかどうか ⑥喪失歯があるか、また義歯を使用しているか ⑦義歯が十分に機能しているか ⑧破折した歯や高度のう蝕はないか ⑨歯周疾患にかかっているか(歯の動揺、歯肉出血の有無)などです。

口腔ケアを行うにあたっては、無理強いせ

ず、信頼関係を大切に、不快、痛み等の訴えを的確に捉え、それを理解し、それに応える姿勢を示すことが大切です。

誤嚥性肺炎とその予防

高齢者の約6割は脳血管障害か認知症と脳疾患に罹患しており、約半数は肺炎で死亡しているといわれています。感染経路としては誤嚥性肺炎の頻度が高く、脳血管障害、および加齢に伴う嚥下、咳反射の低下や感染に対する抵抗力の低下が背景にあります。

高齢者の誤嚥性肺炎の特徴は、知らないうちに繰り返す、むせの無い誤嚥(不顕性誤嚥)です。原因としましては、脳血管障害等による口腔感覚機構の低下、嚥下反射の低下や消失、咳反射の低下が考えられます。また、夜間の唾液の誤嚥、胃食道逆流物を無症候性に誤嚥することも原因とされます。

誤嚥性肺炎の原因菌は、主として口腔内常在菌特に歯周病原菌であるグラム陰性嫌気性菌が強力な起炎菌です。このことは誤嚥性肺炎予防のためには口腔ケア、プラークコントロールが重要であることを示しています。また、口腔ケアにより肺炎の発症率が抑えられることが証明されています。

今後、少しでも多くの在宅医の先生に、口腔観察をしていただき、口腔ケアに関心をもっていただければ幸いです。

日時：平成19年12月4日
場所：荘内病院

庄内地域新型インフルエンザ患者発生想定訓練

岡田 恒人



インフルエンザが流行する寒い季節を迎えました。今年は昨年までと異なり、全国的な流行が早くからおきています。マスコミなどから今年は流行が早いとの情報が流れ、幸い早めの予防接種を受ける人が多いためか、当地区では散発的な発症はあるものの大規模な流行はまだ見られていません。インフルエンザ流行の予防と重症化阻止のためにはワクチン接種は非常に有効です。ところが、近い将来発生するであろう※1新型インフルエンザに対してはこの有効な手段がとれないために、感染が広がった場合の被害は相当大きいものと予想されています。想定される約8週間の流行期間中、日本国内で1300万人から2500万人程度の患者数と7万人から17万人の死亡者が出るのが考えられ、庄内地区でも33000人から61000人程度の患者発生、うち入院患者は500人から1500人、死亡者も230人から470人程度と考えられています。このような大きな被害をもたらす新型インフルエンザ発生に備えた体制整備のため平成19年12月4日(火曜日)、市立荘内病院、県立日本海病院の協力の下、山形県庄内総合支庁保健福祉部環境部の主宰で患者発生想定訓練が行なわれました。

訓練は新型インフルエンザが流行している

某国より帰国した患者が発熱し保健所に相談、荘内病院内に設けられた※2発熱外来を受診し新型インフルエンザと診断され、日本海病院にある感染症専用病室に収容されるまでを想定し行われました。連絡方法、感染防護服を着た上での患者診察と検体採取、専用車による患者搬送、また各医療機関への連絡など実際に行なわれ、さまざまな課題や問題が見つかり非常に有意義なものでありました。

当地区では昨年より山形県庄内総合支庁保健福祉部環境部の主宰の下4回の勉強会を経て平成19年7月12日に庄内地域新型インフルエンザ対策(医療・保険)全体会が開かれました。以後医療対策検討部会等で、これまで提示のあった国、県などからの対策マニュアルと各地域の状況に合わせたすり合わせがなされ新型インフルエンザ対策行動要領作成が行なわれています。マニュアルでは医師会も発熱外来への診療所医師派遣などでの協力が期待されており、今後も訓練などに積極的に参加し新型インフルエンザが発生した場合に備えるべきと思われました。





※1 新型インフルエンザ:H5N1を含む新しい血清亜型のA型インフルエンザウイルスが限定されたヒトからヒトへ感染を起こし広がりだした状態をいう。

※2 発熱外来:病歴や行動歴から新型インフルエンザに罹患した可能性のある有熱者が診断を受けるために特定の医療機関に設けられた外来。



鈴木伸男先生 救急医療功労者厚生労働大臣表彰受賞祝賀会

日時 平成19年12月6日
場所 グランドエル サン

救急医療功労者として厚生労働大臣表彰を受けられた当健康管理センター副センター長の鈴木伸男先生の受賞祝賀会が、去る12月6日、グランドエル サンで開かれました。

この表彰は、救急医療に功績のあった個人、団体が表彰されているもので、本年度は全国で19個人、17団体が選ばれました。

今回の表彰を受け、鶴岡地区医師会と荘内病院の有志で組織した実行委員会が祝賀会を企画し、当医師会のほか酒田地区医師会、鶴岡地区歯科医師会、同薬剤師会、鶴岡市、荘内病院関係者ら約170名ご出席のもと、盛大に開催されました。

参列された方々は、鈴木先生との交友関係の先生、行政側のOBの方々が大勢であったので、それぞれ久しぶりの出合いに話もはずみ、お互い元気であることを喜び合いながら大いに盛り上がりました。



人間ドック結果個別相談会・講演会

今年第2回目の人間ドック結果個別相談者は11名。その後、講演会が開催され身近でだれもが抱えている、水虫についての個人的にも興味のある話でした。

水虫は痒いものと信じていたが実はそうではなく痒みの原因は炎症のためにおこること。自覚症状がでるまえに早めの治療が必要だとおもいました。それから特に興味深く聞いたのは寒い時期、布団に入ると体、腹などが痒くなるのはやはり年のせ

いも関係あるようでした。私もそうですが症状が悪化しない限りなかなか皮膚科の受診は受けないと思います。市販の薬の使用では水虫などの完治は困難だとのこと。私は市販の薬の使用でかゆみがなくなると完治した者と思い放置し、そして又、しばらくすると痒くなったりの繰り返しでした。今回の講演は大変有意義で 今後は、ただの水虫と軽く考えず、早めの受診で完治することが必要だと深く感じました。

管理課 佐々木幸一

日時	平成19年11月29日[木]
場所	医師会館
演題	「身近な足疥癬」 横山 靖 先生
参加者	21名（男性7名、女性14名）
	相談11名



新年抱負(年男・年女)

新年明けましておめでとうございます。

昨年5月に緊急手術、現在は自宅にて療養中の身ですが、皆様のご尽力と温かいご支援に支えられて今の私がある事を肝に銘じて、これからも精進に努めて参りたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻のほどを宜しく願いいたします。

上野 寿樹

鶴岡にお世話になり早50年。昨年はお陰様で開業50周年を迎え、開業以来の全職員と共にささやかな会を開催致しました。現在も午前中は引き続き診療に従事し、年数回学会等研修会の参加を楽しみにしている毎日です。

島 大

還暦と開業二十年を迎えることができ、支えてくださった方々に感謝申し上げます。三島の予言通りの世の中になり、北山修の戦争を知らない子供たちを口遊んでいればよかったのか、その責めを負うべき世代としては戦争によってリセットされることのないことを願うばかりです。

鈴木 準

鶴岡に来て19回目の正月を迎えました。この間皆様方の御支援を頂きここまで来れたことに厚く感謝しております。還暦を迎えるにあたり、医師一年生にリセットして、社会に少しでも貢献できるように努力したいと思っております。

渡邊 清

近くに住む孫たちの成長がなによりの楽しみという年寄りの心境です。地球温暖化問題はいま歴史的な次元で曲り角に来ていると言われていています。のちのちの世代までなんとか平穏に生きられるように、温暖化防止の活動に微力ながら関わっていきたいと思っています。

ささやかなホームシアターでオペラなど楽しんでいます。

渡部 直哉

鶴岡市の母子保健計画の策定委員をしております。母子保健が充実し、安心して子供を生み育てられる環境を整備するように働きかけることが今年の抱負のひとつです。本年もよろしく願い申し上げます。

- 合併前の鶴岡市の出生数は昭和55年の2,053件から平成17年には1,045件と30年たらずで半減しています。このことは約30年後には出産する年齢層の女性は現在の約半数になることを意味しており、平成17年の鶴岡の合計特殊出生率1.47(1人の女性が一生のあいだに産む子供の数：全国1.25、山形県1.45)を仮に維持したとしても平成50年頃には出生数は500あまり、合併した新鶴岡市でも700前後になると予想されます。会員の皆様、この現実をどう思われますか。-

五十嵐 裕一

医者になって20年目、庄内に来て15年目に入りました。麻酔科は、入局当時と変

わらず人手不足で、日々の麻酔に追われ、ペインクリニックには手がまわりません。若い麻酔科医が荘内病院に来ていただけるようにがんばりたいと思っています。

岸 正 人

私の干支（えと）は戊子（つちのえね）、60年に一度その干支が回ってきました。還暦です。同年生まれは227万人いるそうです。ちなみに2007年に成人を迎えた人は135万人、生まれた子供は109万人とのことで、少子化がもろに押し寄せてきています。今年1年で生まれる子が60年後還暦を迎えた時の数は何万人となるのでしょうか？

私が生まれたのは飽海郡観音寺村（町村合併で八幡町、現在は酒田市）、大学時代は6年間新潟市、医師としてスタートした東京での6年間、そして鶴岡へ呼ばれ現病院に勤務し28年目となりました。地方での医師不足問題の例にもれず、当院でも数年前から事態は深刻化しており、日々喘いでいる今日この頃です。

三 浦 二三夫

表紙写真にご協力いただいた先生の紹介（敬称略）

岸
正
人

鈴
木
準

渡
邊
清

島

大

上
野
寿
樹

五十嵐
裕
一

渡
部
直
哉

三
浦
三
夫

ご協力ありがとうございました。

年末に8日ほどスペイン旅行をしてきた。実はスペイン語は一年ほど勉強していたが、そうは言っても初めてのスペインだし不安もあるので、今回はJTBのツアー旅行を選んだ。しかもビジネス・クラスでの旅行なので、飛行機に乗るのもワクワクというところである。

まず、成田空港に着くともうそこからビジネス・クラスは違う。フライトの2時間前に集合したが、出国手続きを終え、フライトまで1時間半ほど時間が余った。しかしビジネス・クラスには専用のラウンジがあり、年末で混雑しているのを尻目にゆったりとソファで過ごしたが、さらにそこにはビッフェ形式の軽食や飲み物もあり、寿司やサンドウィッチは食べ放題、ビールもワインもジュースも飲み放題であったのだ。もうしばらく日本食ともお別れなので、寿司を2〜3個と白ワインをグラスに入れ持ってきて食べた。さらに、昼時で小腹も空いたのでさらにサンドウィッチをつまみ、ビールを飲む。もう快適で飛行機に乗る前からほろ酔い気分である。飛行機はアリタリア航空。スペインというとイベリア航空と思うだろうが、現在イベリア航空は日本には乗り入れていないのだ。それでアリタリア航空でミラノまで飛び、そこで乗り継ぎ、バルセロナへと向かうことになっている。機種はボーイング777、いわゆるトリプルセブンと呼ばれる大型機で、各座席には一個づつテレビが付き、映画も10本以上入っている。ビジネス・クラスのシートは家のソファよりゆったりして、リクライニングも足を上げることができ、ほぼ横になれる。さらに宿泊セットのような小物が入ったバックをもらう。中には歯磨きセットや耳栓、目隠しなどが入っていたが、一番便利だったのはスリッパの代わりに靴下の厚いもので、靴を脱ぎこれをはけば機内どこでも歩いてゆけるし、何より足元が楽だ。

さて楽しみはなんといっても食事。何せイタリアの航空会社だけにどんな料理が出るのかと楽しみにしていたが、期待通りの美味。2種の Pasta はもちろん美味だったが(特にサーモンとブロッコリー)、メインの山羊のチーズを鶏肉の中に詰めて煮込んだ料理は本当においしかった。食後のチーズもおいしく、ワインも進む。ワインは赤ワインも白ワインも4種づつ、それにスパマンテ(スパークリング)もあり、選ぶのにも迷うが、私はサンジョベーゼ(ブドウの種類)が好きなのでそれにした。むろんワインもとてもおいしかった。食後は座席のテレビで、日本で見逃した映画の『トランスフォーマー』を観た。そのうちワインの酔いが回り、リクライニングを横にして眠った。そして目が覚めると飛行機はドイツのあたりだった。夕食で出たサーモンのソテーのレモン・ソースも美味だった。レモン・ソースが絶妙で、サーモンの旨味を上手に引き出している。ただ野菜は半解凍で冷たいものがあり、この完璧でないところがイタリアらしい。

完璧でないといえば、CAたち(今はステューワーズとは云わないらしい)。まあ何がおかしいのか、お互いに顔を合わせてはキャッキョと笑い、おしゃべりしている。でもそれがとてもイタリア的で、その陽気で明るい表情は決してイヤなものではない。これが日本なら、こんな無駄口を話そうものなら上司に怒られそうである。しかしこんなに楽しげなCAたちを見ると、飛行機が好きではない私としては逆にホッとして、なんだか安心して飛行機に乗ってられる。アリタリア航空のパイロットは空軍出身が多い、と聞くがそのせいか実にメリハリの効いた操縦をする。日本のように時間をかけ、ゆっくりといつの間にか高度を下げているという感じではなく、降りるとなったら鷹が獲物を狙うかのように真っ直ぐ降りていく。さらに旋回ともなれば、車でカーブを曲がるようにGがかかるほど鋭く曲がる。いかにも敏腕パイロットが飛行機をドライブしている感じで、慣れてくるとそれが気持ちよく感じる。やがて機はアルプスを越え、無事ミラノに着いた。

新年明けましておめでとうございます。

昨年は色々のことがありました。年金問題、C型肝炎訴訟、食品の偽装、総理大臣の突然の交代、株価の下落、石油製品はじめ多くの商品の値上がり等々。

昨年度よく売れた医学関係書類のベスト5は、「健康食品・中毒症百科」「新たな疫病『医療過誤』」「医療の限界」「医者アタマ 医者と患者はなぜすれ違うのか?」「ノーフォールト」だそうです。「ノーフォールト」は分娩時の妊婦死亡事故を描いた小説ですからいずれも現在の深刻な医療事情を反映しているものということになります。

さすが厚労省もこれ以上の医療費削減は無理だと判断したのか、本年度の診療報酬改定では、医師技術料については0.38%のアップというスズメの涙ほどの改定をおこないましたが、開業医の再診料については値下げの方針を打ち出しました。これでどの程度病院勤務医の待遇が改善されるのでしょうか?「開業医に痛みを分かち合わせて世論の批判を薄める」ということですが、このままでは勤務医が立ち去ることもできず、病院、開業医総崩れの医療崩壊が始まるのかも知れません。

私の属している産婦人科についていえば、酒田地区でお産を扱うのは開業医1軒と総合病院1つの2ヶ所になってしまいます。鶴岡地区もこのままでは数年後には同様の道を迎えることになると思われます。産婦人科に風当たりが強い状態を作っておくと期せずして厚労省が目指している「参加施設の集約化」がどんどん進んでいくことになりました。しかし病院にも医者が少ないのですからこれで本当に大丈夫なのでしょうか?

何年も先の人口構成は分かっているのですから、それが医療者にとってたとえ厳しいものであったとしても、小手先の改定だけでなくもっと大きな将来ビジョンを示して欲しいと思うのは私だけでしょうか?今年もめでたくない話になりました。すみません。

本年が皆さまにとって健康で良い年でありますようにお祈りいたします。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・齋藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)